



瓊浦高等学校
学校通信
第 108 号

令和3年8月30日発行
電話 095-826-1261
FAX 095-820-5245

瓊浦窓 の

「思うは招く」

校長 渡川 正人

令和3年度も5か月が経過しますが、新型コロナウイルス感染は収束に向かうどころか、デルタ株の出現によりますます先が見通せない状況になっています。学校の教育活動は、感染状況に伴い県が発表するステージ段階等に左右されながら対応しています。

先日お知らせしましたが、「体育祭」は残念ながら中止することとしました。生徒の大切な成長の場であり、特に3年生にとっては思い出に残る大きな学校行事でもありますが、本校での2件のクラスター発生、昨今の県や全国の感染状況、室内（県立総合体育館）で計画していたこと、事前練習での感染が心配されることなどによるやむを得ない判断です。保護者の皆様にもご理解をいただきますようよろしくお願いいたします。

昨年度中止となった県高校総体については、今年は無事実施され、全ての部が各部ごとの目標を目指して、2年間の想いを胸に、心をひとつに、本当によく頑張ってくれました。そしてインターハイにおいても男子バドミントン部の団体3位など、多くの部が全国の舞台で素晴らしい頑張りを見せてくれました。

さて今年度は校長が掲げるスローガンとして「3つのC」を掲げて生徒に話をしています。「3つのC」とは、Challenge（挑戦する精神）、Compassion（思いやりの心）、Control（自分を律する力）です。

ところで、「思うは招く」という本があります。これは北海道で社員18人の会社を営む植松努さんという方が書いた本です。この会社は小さい企業ではありますが、世界で初めての爆発しないロケットエンジン開発、世界に3つしかない無重力空間をつくる実験装置を持つなど世界最先端の技術を誇っています。

植松さんがこの著書で主張されている「思うは招く」とは、「思う」という行為が結果を「招く」、つまりいいことを思えばいいことにつながる、できると思えばいい結果につながるということです。もちろんその逆もあります。この本には「どうせ無理」という表

現がたくさん出てきます。そして、「どうせ無理」という言葉は人の自信を砕き夢を奪うということ、未来とは可能性をあきらめて今の自分にできる範囲から選ぶものでは決してないということ、本当の夢とはやってみたいことをどうやったらできるか考えてやり始めること、などが述べられています。植松さんはこれまで、人の自信や可能性が奪われない社会を作りたいという思いで、「どうせ無理」と多くの人から言われた中で、可能性を信じて宇宙開発に挑んでこられました。

「思う」とは具体的な目標を持ち、それが達成できると信じることであり、その実現に向けて考え創意工夫しながら努力することが大きな成果を「招く」ことになると思います。本校生徒も、「どうせ無理」という考えではなく「思う」気持ち、すなわち「挑戦する精神」を持って日々努力し、よい結果を「招く」ことにつなげてくれることを願っています。

《9月の行事 変更分》

4日(土) 体育祭(県立総合体育館) **中止**

6日(月) 第2回実力考査(1・2年)
当初予定の8月23日(月)から変更

《学校日課の変更》

当面の間... 9:30登校

短縮40分授業(1~6h、火曜日は1~7h)



**不要不急の
外出は
控えてください**

【部活動戦績】

男子バドミントン部

男子バドミントン部 [8月26日]

令和3年度全国高等学校総合体育大会バドミントン競技大会

男子団体

令和3年度第26回全国私立高等学校選抜バドミントン大会(団体戦)

第3位

優勝(2大会連続)

男子個人シングルス

田中 市之介(普3D)

第5位

インターハイ出場部活動

女子ハンドボール部

卓球部 中道 萌花(普2D)

田川 優月(普2D)

水泳部 竹野 友貴(機3B)

柔道部 橋本 龍治(普3D)

松田 基裕(普3D)



被爆から76年～長崎の平和について考える～

令和3年度
平和推進委員

8月9日(月)は本来ならば全生徒が登校し、平和について考え、黙祷を捧げる日です。しかし、感染症の猛威は本校まで波及し、この日は休校せざるを得ない事態となりました。8月30日(月)に各教室で平和学習が簡易的に行われますが、例年と大きく異なる平和学習となっています。いつもならば9日に平和集会を行い、午後は平和推進委員約50名が学校から爆心地公園まで歩き、全生徒・職員が折った千羽鶴を献納します。いわゆる「ピースウォーク」です。集会もピースウォークも未実施に終わりました。

ここでは、例年そのピースウォークの道中で立ち寄っている山王神社(長崎市坂本町)の「一本柱鳥居」、「被爆クスノキ」をご紹介します。

一本柱鳥居

爆心地から南東約800mにある一本柱の鳥居は、原爆の威力を物語る遺構の一つです。この鳥居は山王神社の二の鳥居。鳥居は全部で四つありましたが、一の鳥居(全部)と二の鳥居(半分)を残して全壊。一の鳥居は後に交通事故で倒壊し、現在残っているのはこの半分になった二の鳥居のみです。

この二の鳥居には、様々な傷跡が残っています。たとえば、原爆の熱線で石が溶け、柱に刻まれた奉納者名が読めなくなっています。また、柱の上の笠石も風圧でねじ曲げられ、13度ずれています。破壊されたもう半分はすぐそばに保存されているため、同じ場所で見ることができます。

一本柱鳥居は原爆の凄惨さを体現しつつ、それを乗り越えた鳥居として、76年経った今もバランス良く立ち、参道を行き交う人々を見守っています。



被爆クスノキ

山王神社には樹齢500年と言われる二本の大クスがあります。原爆で見ても無惨な姿となり、蘇生は望むべくもないとされましたが、徐々に元気を取り戻し、見事な葉を茂らせます。その姿は、70年は草木も生えないと言われた長崎の地に住む人々に希望を与えました。

2006年に台風の被害に遭い、樹木医による治療を受けました。その際に幹の中に新たな空洞が見つかり、そこから被爆当時のものと思われる石や瓦礫が見つかりました。

その巨樹としての佇まいのほか、原爆の被害から生き残った樹木としての意義は深く、長崎市の天然記念物に指定されています。また、境内を通る風で起こる葉擦れの音も、環境省によって「残したい日本の音風景100選」に選ばれています(長崎県では唯一)。

長崎原爆資料館や学生サークル、市民団体、地元小学校など様々な団体が、その種子から育てた「被爆クスノキ2世」を平和の象徴として国内外に贈る活動を行っています。



これからの長崎

左で紹介した被爆クスノキですが、長崎市出身アーティストである福山雅治さんが2014年に発表した曲『クスノキ』はこれを題材としています。この歌を聴いた多くのファンが長崎を訪れ、クスノキを見て、そして長崎で起こったことを知りました。自身も被爆2世である福山さんは、歌を通して平和を発信しています。戦後76年、平和を訴える主体は被爆者本人から、その次の世代の人達へと移り変わりつつあります。

76年前、瓊浦高校の職員1名、生徒55名を含めた約7万4千人が亡くなり、約7万5千人が重軽傷を負って、街は破壊し尽くされました。そのことに関して、瓊浦生全員が表立って平和活動を推し進めていく義務はありません。スケールの大きい世界平和の前に、身の周りの平穏で手一杯でしょう。しかしながら、かつて起きたことへの哀悼の意、そこから復興を果たしてきた長崎の強さへの畏敬の念は、いつまでも心の中に持っておいてほしいと思います。何歳になっても、長崎以外で過ごすようになって、その思いだけは変わらずにいてください。そして8月が来るたびに、その思いを誰かと共有してもらえれば、瓊浦での平和学習は意義のあるものになります。

最後に、今年度は未発表に終わった「瓊浦高校平和宣言文」をご紹介します。締めくくりとさせていただきます。



令和3年度 平和宣言文

今から76年前 1945年 8月9日 11時2分

長崎に原子爆弾が投下され、私達が住むこの長崎の地は一瞬にして変わり果てた姿となりました。この原爆により約7万4千人という大勢の人々の命が失われ、生き残った方々も、今なお戦争の記憶や後遺症に苦しんでいます。

戦後しばらくして、非核三原則が打ち出されました。この悲惨な出来事を二度と繰り返すことのないよう、核兵器を持たず・つくらず・持ち込ませずという日本人の結束のもと、戦争を繰り返さない平和な世の中を守り続けることができている。

現在日本では、戦争こそありませんが、新型コロナウイルスの影響により多数の命が奪われています。そんな世の中で私達にできることは何か。それは、自分の命はもちろん、一人一人の命を大切に、生きていることに感謝することではないでしょうか。この状況の中で、一人一人ができることを考え協力することが、世の中を平和に過ごせるようになる第一歩だと私は考えます。

76年前に起きた悲惨な出来事を忘れずに、平和であることと命の尊さを次の世代へ伝えていけたらと思います。今、原爆で亡くなられた方々に心から哀悼の意を捧げます。私達は今後、核兵器廃絶と世界平和実現のために努力していくことを誓い、これを瓊浦高校平和宣言とします。

令和3年8月9日 平和推進委員一同